

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(二十一)



津 守 真

子どもたちの動きに調和があること

○
ことを少しばかり考えてみようと思う。

子どもたちが、一つの目的に向かって動いているのではなく、部分的には葛藤もあるのに、全体としてみると、みんなが調和を保って、落着いた時をつくり上げていく日がある。そのような調和の印象を与えられるのは、そこでどのようなことが起っていると
きなのであろうか。四歳三学期の終りに近い一日の例から、この

二月二十八日

朝、静かな園庭

砂場で、男児、I、K、S、Sh、Tらが、砂を掘ったり、水を流したりしている。Tはじょうろの水を注ぎながら、「おしっこ」と言っている。Iは水たまりを作って、「みずうみ」と言っている。S、Shが一緒に交ってやっている。一つのじょうろを、ShとIとが両方から持って、水をいれに水道に行き、結局、Iが水を入れる。みんなで互いによく遊んでいるので、私は砂場に入ってゆくのもためらわれて、階段に坐っている。

朝、園庭に出ると、子どもたちが遊んでいるのに、静かな印象をうける。みんなが、それぞれ、よく遊んでいるからだろうと思う。

砂場では、男児数名が砂を掘ったり、水を流したりしている。砂を掘り水を流しているというのは、その場にゆきあわせた私たちが、その瞬間だけでとらえたところであって、子どもたちの世界では、さまざまなことが起っているにちがいない。たとえば、砂を掘る作業では、前にも述べたように、子どもは地下の奥にまで達する穴を掘っている場合もあるし、何度も反復して叩いて深く

えぐっているのであることもある。その他、いろいろの場合があるだろう。朝、そこにゆきあわせた私には、そこで砂を掘っている子どもたちの心に起っていることを知ることはできない。砂を掘っている子どもたちは、それぞれ、自分にとって意味のあることをしているのだろうと察するだけである。

水を流す作業についても、水路を作っている場合や、激しい流れを作ることに関心が向けられているときなど、いろいろの場合があつて、ここで何が行なわれているのかは、直ちには分らない。しかし、それぞれの子どもが、何か意味のあることをしているに違いない。ほんの一行の記述であるが、その背後には、さまざまな世界が秘められている。

おしっこ

そのときに、その内容の一端を示すできごとが起る。男児Tが「おしっこ」と言つて、そこにじょうろの水を注ぐ。それに対して、だれも何も言わない。同じように水を流しても、めいめいが自分の考えをもって流していて、Tの発言には関心をもたないのかもしれない。あるいは、Tの発言は、当然のこととして受

けいれているのかもしれない。恐らくその両方だろうと私は思う。Tは、外来者である私のところにしばしば近寄ってくる子どものひとりである。そして、私が親しく相手をするところぶ。

Tがじょうろの水を注ぎながら、「おしっこ」と言うとき、じょうろの口から水が噴出する様子がおしっここのようだと比喩として言っているのではないであろう。自分が砂場で本当におしっこをすることはしないけれども、じょうろの水を注ぎながら、本当におしっこをしているような快感を感じているのであるろうと思う。おしっこは、子どもにとってはとくに、自分の体の中のためである液体であり、自分の体の一部である。おしっこは、おとなからは汚いと言われるけれども、子どもにとっては、大切な分身である。だから、おしっこを体外に排出したとき、幼い子どもはそれに興味をもち、さわったり、いじったりする。じょうろの水をおしっこと言って注ぎ出すとき、じょうろは子どもの体であり、膀胱であり、そこから出る水は、Tの分身である。砂場の中で、みんなが穴を掘ったり、水を流したりしているところに、Tは分身である水を注ぎ、それがみんなの水や砂にまじってひとつのものとなる快感を味わう。みんなは、それぞれ自分のイメージをもって遊んでいるのであるが、Tのおしっこの水を汚いと言わず、あたりまえのこととして受けられる。現実の子ど

も同士の接触の時には、葛藤を生じてうまく交われなくとも、子どもたちは、おしっこを受け入れて、自分たちの生産物とまぜこぜにすることは容易である。Tは、この点でも、他の子どもと交って一つになる体験をしていると考えてよいであろう。

Tとのつきあいの浅い私には、Tの成育歴の中で、おしっこがどのような意味をもっているのかは分らない。しかし、多分、Tがじょうろの水をおしっこと言って注ぎ出すのには、何か自分自身の心にある抵抗を破らねばならなかったのではなからうか。Tがおとなの助けをかりないで、自分らしく振舞い、それが何の異和感もなく皆に受け入れられていたところに、この朝の遊びの特色の一端が見られる。この日の朝、子どもたちの動きに調和があると私が感じる事ができたのは、子どもたちの中に、こうした無意識のまじりあいが出ていたことによるのであると思う。

「おしっこ」と言って、じょうろの水を砂にかけている何気ないひとつの行為の中には、こうした無意識のはたらきがある。

みずうみ

Iは水たまりを作って、「みずうみ」と言っている。

同じように水を流している、Iにとっては、おしっこではなく、「みずうみ」である。Iはほとんど毎日のように砂場で遊んでいる子どもであるが、水を流して、海とか川とか言っているところにはしばしば出会ったことがある。そのいろいろの場面を思い浮べてみると、海は砂場の全面にまでわたるほど広い部分にまで水を流しているときであり、川は次々に水を流してできる水路であり、途中に滝ができたり、ダムができたりする。それに対して、この日の湖は、まわりを砂山で囲んで作った水たまりである。このような呼び名は、たまたまできた形が、海や川や湖に似ていたから、そのように名づけたのではないと思う。水を流し、砂を掘って作りながら、子どもの心の中に動いているイメージがあると考える。海は広くひろがり、水を流して波立つ動きをもつし、川には激しく流れる動きがある。

Iはしばしば、山の上に水を流して、火山の爆発と言う。このような激しい動きに対して、「みずうみ」は、山に囲まれた水たまりで、静かさを作り出している。Iが「みずうみ」と言ったのは、偶然の思いつきではなくて、みずうみを作りだしたい気持が先にあったからだと思う。海や川や爆発のエネルギーに満ちた動のイメージを示すことが多いが、このときは、それと対比的な静のイメージを作り出している。冬の朝の静けさ、外に発散するよ

りも内に閉蔵しようとする冬季の子どもの自然の心の動きなどが、Iの「みずうみ」のイメージとなってあらわれていると見ることができよう。

一緒に交わる

SとShが一緒に交わってやっている。

SとShは三歳のときからいる子どもであり、Iは四歳から入った子どもである。四月のはじめに、三歳からいた子どもと、新しく入った子どもとが一緒にあそぼうと、新しく入った子どもが物を差し出したときに、古くからいた子どもが、「なんだ　こんなの」と言っただけで受けとらなかった。その驚きを、私はこのシリーズの(十二)、七十六巻十号に記した。その同じ子どもたちが、ここでは、みんな一緒に交わってやっている。

ひとつのじょうろを、ShとIとが両方から持って、水をいれに水道にゆき、結局、Iが水をいれる。

これは、奪い合いというほどの場面ではない。二人の子ども

が、ほとんど同時に、じょうろに水をいれにゆこうと思った。そして、ひとつのじょうろを両方から持つて、水道にゆくことになり、結局、自然に、Iの方が水を入れることになった。Iは、おそらく、Shからじょうろを奪いとりとういう意識はなかったと思う。もしも、そういう意識をもったとしたら、Iは、相手にゆずるほどの紳士である。Shも、奪いとられたとは思わなかったと思う。最近では、Iの方が砂場で遊ぶことが多く、少し力が優勢だったというところであろう。

そのあと、両者はまじって、砂場で遊びつづける。SとShには、それぞれ、自分のイメージがあつて、ここで遊んでいるのだと思う。三歳からいた古い子どもと、四歳から入った新しい子どもとの葛藤はここでは消えて、同じ場所ですべて子ども同士の関係になつてゐる。また、ここでは、力関係で動くのではなく、それぞれが自分のイメージを追求して動いている。

私は砂場に入ってゆくのをつためらう気があつて、階段に坐つていたのは、子どもたちのそのイメージの動きをそのままにのばしたいと思ひ、その成行きを見たいと思つたからである。

動きのある生命体が調和を保つのは、それぞれが、自分らしさを發揮して動けるようになったときであると思う。すなわち、それぞれに自分のイメージがあつて動き、その中から、新たなイメ

ージが生み出されるような状態である。子どもの中から生み出されたイメージは、子ども同士の間で尊重されることは事実である。おとなが規則をきめたり、標準をきめたりすると、そこに優劣や序列が生じる。共通の目的に向つて協力する場合のみではなくて、同じ場所において、それぞれが自分のイメージによつて動き、全体として調和のある状態というのは、保育の中でしばしば見られることである。それは思ひがけないときにやってくる。

雨の日に、子ども同士のぶつかり合いが多くて、その中で夢中になつて過し、ひる近くになつて、気がつくと、騒音や動きは激しいのに、それぞれが自分の遊びをしていて、全体として調和がとれた状態になつてゐることを体験している保育者は多いと思う。それは保育者が綿密に計画を進めることによつて得られるというよりも、子どもの要求に応じるのに忙しく動いている間に、自然に現出していることが多い。すなわち、子どもたちが、自分のイメージをもつて、自分らしく動けるようになるのに、保育者の助けを必要とするが、そのあとは、子どもがつくり出すのが、幼稚園の生活である。

この日は、朝から、子どもたちの間に調和のある生活があつた。四歳児の一年間を通して、どの子どもにも、先生との間で、自分らしく動けるようになる下地がつくられていたことを示すも

のであろう。

砂場の外では、女兒 m、e、h が 3 人かたまつて、いったりきたりしている。m は、私を見つけるとよく傍にくる子どもであるが、私に見向きもせず、他の子の方にゆく。m はとくに、e のあとをついてゆき、e が滑って地面にしりもちをつくと、m も滑ってしりもちをつく。e と一緒にいて、同じことをするのが楽しいようである。男の子や女の子が何人も群をなして、走っていたり、きたりしている。

e が滑って地面にしりもちをつくと、m も同じように、滑ってしりもちをつく。こういうのを見てみると、つい笑ってしまう。

e はわざとしりもちをついたのではない。偶然にしりもちをついたのである。それなのに、m は、e と同じようにやってみる。それほどに、e と一緒に歩きまわっていることが楽しく、魅力のあることなのである。おとなだと、特権や力を持った人のしぐさをまねたり、また、尊敬する人の言動をとりいれたりするが、この子どもの場合は、それとは違う。友だちと一緒にいることが楽しくて、相手が偶然にやった動作をその通りやってみるのである。

一緒に歩きまわるだけ、一緒に坐っているだけで、それを共に楽

しんでいるとき、他人と時間を共有し、体験を共有し、自分の世界が他にまでひろがっているのであると思う。これがないと、目標に向って協力することはできるようになっても、他の人への愛は生れない。m は、他の子どもと交わることが遅かった子どもであるが、今、着実に交わりはじめているのを見ることができ

こうして、私は子どもたちの中に入ることをためらって、坐っていると、突然、Ke が私の肩にとびのる。しばらく、乗ったりおりたりしていると、Ta が同じように私の肩にのる。二人で私の肩の上で暴れていたが、じきに、二人とも走り去る。子ども同士の遊びの合間に、おとなとの安定感を求めて立ち寄ったのであるう。

砂場では、いつのまにか、そこにいた子どもたちの全員が、容器に水をいれて、砂場のへりに並べている。Sh と K が、コーヒーと言って、私のところに水をいれた容器をもってくる。

いつのまにか

生命的な過程の場合には、意識的、意志的な転換の契機がない

ので、内的にも、外的にも、時間経過に伴う変化が認識されにくい。この場合には、私は砂場の中だけを見ていたのではないので、私が見ることのできなかつた場面も多くある。保育において、保育者は子どもたちに応じて動いているので、一つの場面の経過を終りまで見とどけることができない場合が多くある。そして、気がついてみると、いつのまにか、遊びは変化している。しかし、遊びの場面では、継続的に観察していても、変化の契機は明瞭につかめないことが多いのである。遊びは、子どもの方から言っても、意志的に変化させているのではなく、まして、おとなの意志や約束によって変化させたら、遊びは変質してしまう。遊びは、子どもの中に自然に生れて、自然に変化するイメージによって動くので、いつのまにか変化していると言えない場合が多いのである。

○

四歳児も終りに近いこの日の朝、子どもたちの動きに調和があるように感じられたことを述べた。それは、同じ場所、同じこ

とをしているように見えても、それぞれの子どもが、めいめいの心の底にあるイメージを動かして、そこで遊んでいることによるのであることを指摘したつもりである。それぞれの子どもが自分らしく動けるようになるのには、集団にとっても、個々の子どもにとっても、また保育者にとっても、さまざまな条件が必要なので、クラスの全体が調和のとれた動きをすることができるのは、ある限られた時である。そして、次の瞬間には、調和は破られる。

ここでは、複数の子どもたちの間に生れる調和について、朝の遊びを例として述べたが、これは一例であって、異なつたさまざまな具体例から、同様のことを示すことができる。ことに、子どもたちが自由に描く描画をみていると、同じようなものを描きながら、それぞれが異なつたイメージをもって、ひとつの画面がつくられるのにゆきあたることもある。(共同製作について言っているのではない。)それぞれの場合によって、イメージの具体的内容は異なるが、それぞれの子どもが、自分らしさを發揮して動けるようになったときに調和が生れる瞬間のあることについて述べた。不調和や葛藤をふくみながら動く、保育という大きなうねりの中の一瞬間である。

(つづく)